

何が日本人の行動を決めるのか

濱口 恵 俊*

The determinant of action of the Japanese

Eshun Hamaguchi : Department of Human Culture,
The University of Shiga Prefecture

This paper aims at clarifying the principle of orientation of the Japanese. Two principles, (1) the situational behavior pattern and (2) the outside-in principle, are shown. After pointing out these principles, the merit of the Japanese orientation, the conception of a person and a human nexus defined by the Japanese, the international research data on the “contextualism” and the “individualism”, and the nature of “self-determination” of the Japanese people are discussed.

キーワード

状況対応型行為 the situational behavior pattern
アウトサイド・インの原理 the outside-in principle
個人・間人 the individual and the contextual
個人主義・間人主義 individualism and contextualism

I はじめに

日本人の国民性を考えると、その行動形態は、欧米人のそれとの比較ではかなり対蹠的である。欧米においては、それぞれの個人は、行為志向に際して、目標（欲求）達成への強い動機づけと、それを規制する社会規範との間でかな

*滋賀県立大学教授・国際日本文化研究センター名誉教授

りの葛藤を抱き、両者間でぎりぎりの妥協を図ろうとする傾向がある。パースンス風言えば、動機づけ志向(motivational orientation) と価値志向(value orientation) との両立性の確保が最大の課題となる。これに対し日本人の社会的行為では、基本的には、それら二つの志向の間での葛藤や緊張を未然に回避するようなメカニズムが働いているように思われる。ではそれはどのような機構なのか。二つのポイントがあげられる。

II 日本人の行動原理

1. 状況対応型行為

行為者は、自己の志向の枠組みのなかで、動機づけ志向が価値志向によって規制されるよりも前に、価値志向の実質内容をなす基準系を、行為者の価値観に基づいて、あるいはそのおかれた「状況」に対応づけて設定すると考えられる。行為の基準そのもの(規範もしくは標準)は、所与的なものではなく、志向のたびごとに設定されるのが普通である。日本人では、こうした志向形態が自明のものとなされ、欧米のように、歴史的・社会的に固定化された「定律規範」が、最初から基準系としてセットされてはいない。また、一定の価値観に依拠する「価値規範」が設定されることも少ない。むしろ、「状況」に柔軟に対応した、その場その場にふさわしい「標準」(standards) が設定され、それに基づいて動機づけ志向が制御されるのである。

このような志向のサイバネティック・モデルがよく当てはまるのが日本人の社会的行為である。その「状況対応型行為」では、基準系が行為者サイドで、志向のたびごとに設定されるから、欲求充足についても、「状況」と見合うかぎりでは許容される度合いが大きい。したがって定型化された「規範」との相克は回避される。「規範依拠型行為」の場合よりも、複雑な問題への対処が容易であり、社会変動に対しても許容的である。

2. アウトサイド・インの原理

「状況」は、社会的な場面では、他者との相互関係のネットワークとして構築される。「状況対応型行為」の場合、そうした対人関係ネットワークのなかで、行為者は、自己自身ではなく、むしろ他者の側に自己の行為の拠点 (point of reference) を設定する傾向が強い。相互作用において、このように、自己自身ではなく、他者の側に志向の拠点をおくタイプを、「アウトサイド・イン (outside-in)」行為と呼ぼう。これとは反対に、自己の側に行為の拠点を設定するタイプは、「インサイド・アウト (inside-out)」行為と名づけられる。両者は、志向の最初の基点が、他者サイドにあるか、それとも自己自身におかれるかの違いであって、相互に転換しうることはいうまでもない。たとえば、航空機のパイロットが、高いところを飛ぶときは、自機体の窓枠が知覚の基準枠となり、「インサイド・アウト」型の操縦をするが、着陸態勢に入ると、前方の地平線が固定された基準枠に自動的に切り替わり、「アウトサイド・イン」型の知覚をするようになる。パイロットたちは、着陸行動の安全性を高めるために、その切替えをなるべく早い段階で、意識的に行う訓練を受けているのである。

日本人では、「アウトサイド・イン」型の行為原理に基づいて振る舞うことが多い。これに対し、欧米人は、拠点を自己のほうにおいて、「インサイド・アウト」的に行動する傾向があるとされる。もちろん日本人も単独で行動するときには「インサイド・アウト」型だが、対人関係ネットワークのなかでは「アウトサイド・イン」型へと態度をシフトさせる傾向が大である。このタイプの社会的行為では、相手の立場に自己の身をおき、その視点から相手を理解し、自己本位ではなく、相手を考慮した形で対処するから、自己の恣意的な欲求はおのずと抑制される。つまり対人志向的にならざるを得ない。その結果、動機づけと価値志向とのバランスはうまく保たれることになろう。

III 日本人の行為志向のメリット

このような「状況対応型行為」と「アウトサイド・インの原理」によって、行為者の欲求は、適度に許容的であったり、自己規制的であったりするが、その行為が決してひとりよがりな志向に陥ることはない。行為者のおかれた社会的環境、つまり「状況」に配慮し、しかも相互作用する相手の立場を念頭においた振る舞い方をするようになる。日本人の行為志向の最大のメリットはそこにある。

一例をあげてみよう。国民性の違いをステレオタイプ化された形で表明するようなジョークがある。サイマル・インターナショナルの会長であった村松増美氏の紹介したもののだが、荒天で難破しそうな豪華客船の船長が、救命ボートに子供や女性客を優先的に乗せるために、各国の男性客に救命胴衣をつけて海に飛び込むことを要請したとき、どのように言ったかという話である。英国人には、「あなたは紳士ですよ」、ドイツ人には、「これは船長の命令だ!」、アメリカ人乗客には、「どうぞ後のことはご心配なく。あなたには生命保険がかけられていますから」。そして日本人には、「ほかの皆さんは、もう飛び込んでおられますよ」と耳元にそっとささやいたのだった。

日本人乗客がそのささやきに応じて飛び込んだとしたら、いかにも集団主義的であり、自律性に欠ける国民性の現れだ、と感じられるかもしれない。ほかの人の行動を見ながら自分の行動を決めるのだから、だらしがないと思う人が多いに違いない。同調行動が日本人を特徴づけている、とみなすのである。確かに欧米人の場合、紳士の態度、命令への服従、生命保険へのコミットメント、といった個人的な判断が行動を決定している。これに対し日本人は、皆がどうしているかがその判断基準となっている。

しかしそれが単に集団主義的な非自律性を表明するだけのものであろうか。別の解釈も可能であろう。こうした危機的な状況でも、自分だけのことを考えるのではなく、ほかの日本人を思いやり、「ほかの人たちがもう飛び込んだのな

ら、もう自分がここに残っている必要はない」と判断したかもしれないのである。そこには、「状況対応型行為」と「アウトサイド・インの原理」に依拠する日本人の姿が眺められる。

日本語の会話で、「はい／いいえ」という言葉は、英会話での「イエス／ノー」とは意味が違う。日本語の「はい／いいえ」は、「イエス／ノー」のような、自分の意思のストレートな表現ではなく、相手が疑問として口に出した事柄が、事実には照らして正しいか、間違っているか、あるいは自分の気持ちと合致しているか、それとも違っているかを、返答する言葉である。意思を尋ねられたとしても、「はい／いいえ」は、間接的な意思表示であるに過ぎない。会話の最初の拠点は、つねに相手の側におかれている。相手の疑問とする事柄をそのまま自分のほうにいったん受け止めて、その正誤判定をする語が、「はい／いいえ」なのだ。

ここにもまた、「アウトサイド・インの原理」が働いている。これに対して「イエス／ノー」は、「インサイド・アウト」型の返事である。この違いに気づかない日本人は、英会話で、「はい／いいえ」の感覚で「イエス／ノー」を使うから、応答が逆になってしまい、間違えてしまうのである。自分にそうする意思があれば「イエス」、なければ「ノー」と言えばすむことである。

日本語で自分を指す言葉が相手次第で変わるというのも、「アウトサイド・インの原理」に従っている。言語社会学者の鈴木孝夫氏の言うように、「自称詞」は、自分より目上であるか下の者であるかによって違ってくる。たとえば、小学校の教師が、校長に対しては「私」、親・兄・同僚には「ぼく」、妻には「おれ」、弟には「兄さん」、子供には「お父さん」、生徒には「先生」、近所の子には「おじさん」と称するのである。特に目下から呼ばれる呼称をそのまま引き取って、「自称詞」とする点で、「アウトサイド・インの原理」が作動している。

「状況」の認知と、相互作用する他者への関与が、日本人の社会生活にとって非常に重要であることを例証してみよう。高速道路を走行中のことであつたが、前を行く小型トラックの後ろの扉に、「追突注意!」と大書してあり、その下には、「私は法定速度を守ります」と記されていた。その車の運転手は順法精神に

富んでいるが、そうした道路「状況」では、当の車だけ時速80キロで走っても、他の車が同じスピードで走行しないかぎり、かえって追突事故の原因になりかねない。そのことがわかっているからこそ、「追突注意！」と書かれていたのであろう。法定速度での走行は、社会性があるようで、実はひとりよがりなのである。

ハイウエーでは、リーズナブルな範囲ではあるが、速度を多少オーバーしても、互いに相手の車を信じて、スムーズな流れをつくることのほうが大切だとされる。こうした走行「状況」は、「複雑系」そのものであって、互いの関係そのものが一定の秩序をつくり出す大きな要因となる。相互信頼に基づいておのずと編成されるシステムに、みずからの身をゆだねるしかないのである。ここでもまた、「状況対応型行為」と「アウトサイド・インの原理」とが、日本人の社会行動を基礎づけている。

IV 日本人の人間観・対人関係観

このような日本的な行動特性は、その人間観や対人関係観に由来するであろう。つまり、〈にんげん〉を、個体的な自立性を標榜する「個人」としてではなく、「人間」すなわち「人と人との間」における〈ひと〉として、関係性のなかでとらえる民族性に根ざしている。このような〈にんげん〉観に基づく人間モデルを「間人(かんじん)」(the contextual)と呼ぶことにしたい。それは関係集約型〈にんげん〉を指している。もっとも、「間人」が日本だけに限られた存在ではない。より一般的な〈にんげん〉類型であることは、長い人類史からも明らかである。

しかしそれは、個体集約型〈にんげん〉としての「個人」(the individual)とは、概念上対照化される。後者は、関係性を戦略的視点から眺め、個体的自立性のほうを尊重するような、特定形態の〈にんげん〉モデルを指している。システム理論的に言えば、「個人」が〈にんげん〉存在の「個別体」(individum)であるのに対して、「間人」のほうは、その普遍形態である「関係体」(relatum)

に属している。

「間人」と「個人」の抱く価値観、すなわち「間人主義」(contextualism)と「個人主義」(individualism)の世界における現状については、私の行った国際比較調査の結果によれば、「間人主義」のグローバルな遍在性は明確な事実である。世界約20か国、6000人を対象として行った、これら二つの対人関係観についてのアンケート調査では、相互依存、相互信頼、人間関係の本質視という三つの属性をもつ「間人主義」の支持度は予想以上に大きかった。しかもそのサポートは、日本よりも欧米のほうが強かった。自己中心性、自己依拠、対人関係の手段視を基本属性とする「個人主義」の支持は、日本をも含め、世界中程度のものであり、特に欧米で強いということはなかった。

「間人主義」の全世界における総平均値は、中間値の72点をはるかに上回る90.6点であり、「個人主義」のそれは、中間値をやや下回る70.6点であった(それぞれ24個の意見項目を、賛否に関して5段階評価をしてもらい賛成度の高いほうから順次5～1点を配点。各最低点は24点、最高点は120点)。この分布傾向は、東アジアにオリジンをもつ「間人主義」ではあるが、その普遍性を世界的に立証するものであった。(詳細に関しては、濱口恵俊、「欧米は個人主義の社会か」、京都新聞、1997年8月29日、参照。調査データに関しては、『関係集約型人間による社会編成原理の研究』、国際日本文化研究センター刊[非売品]、1997年、を参照されたい。)

V 日本人にとっての「自己決定」

こうした実証的なデータからしても、本来日本人に特有であったと考えられていた行動様式や価値観が、意外にも世界的に理解され、支持されていることがわかる。それは、要するに相互の関係性の重視であり、おかれた「状況」の直視にほかならない。その場その場の実情に即して、しかも相手の立場を参酌して適切に行動することが、相互の信頼関係の樹立にとって重要であることが、従来もっぱら「個人主義」に立脚して、自己依拠的に生活してきた人たちにも

了解されるようになった、とも言えるのではないだろうか。

「自己決定」の意義が説かれることの多い今日であるが、それは、少なくとも日本人に関しては、決して自己一人の専断的決定であってはならない。「状況」を考慮し、他者との連関でことを決めるのは、なにか頼りなさを感じさせるであろうが、そのほうが自己の属する社会システムにとっては、より効率的であり、ある意味では合理的でもある。相互依存は人間の本態であって、そのほうが自然なあり方なのである。その「自己決定」は、他者連関的で、かつ「状況」適合的でなくてはならない。

現代社会における社会編成の原理が、かつての「効用」中心から、人と人との間の「信用」をベースにするものになりつつある。そうしたときに、「状況対応型行為」と「アウトサイド・インの原理」ののっとなって志向する日本人は、世界に先駆けて、「状況」要因と「対人連関」要因によってその行為を決めている、と言えよう。生命倫理における「自己決定」も、そうした社会的倫理に根ざしたものであることが望まれる。
